

Title	堀田誠三著 ベッカリーアとイタリア啓蒙
Sub Title	
Author	奥田, 敬
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1998
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.90, No.4 (1998. 1) ,p.945(251)- 949(255)
JaLC DOI	10.14991/001.19980101-0251
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19980101-0251

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



堀田誠三 著

『ベッカリーアとイタリア啓蒙』

名古屋大学出版会，1996年11月，p.ix+260+26

1

本書はイタリア啓蒙に関するわが国では初めての研究書であり，世界的にも注目すべき業績である。堀田誠三氏は水田洋教授のもとで社会思想史研究を志し，故フランコ・ヴェントゥーリ教授の薫陶を受けた。『近代人の形成』の視角から『改革の18世紀』を問いなおすこと——ここから堀田氏は出立したに違いない。そして《ヨーロッパ啓蒙思想のもつ複雑で豊かな水脈をほりおこす》ために思想史研究の「周辺部」イタリアに沈潜すること十有余年，氏はついに《イタリア啓蒙の研究は，啓蒙思想を近代合理主義とその普及とみなす単線的な理解に反して，常識的には啓蒙の対立物とされるロマン主義的傾向をもふくむ，諸思想の反響と交錯のうちに近代社会の主体形成の方向を模索したものが啓蒙思想であることをしめすであろう》(ii頁)と見晴かす地点に到達した。啓蒙には「理性」，ロマン主義には「感情」が，常識的には振り宛てられるところであろう。そこに「知識人」と「貧民」の分裂を見だし，イタリアにおける啓蒙の弁証法を描ききったところに堀田氏の独創が存する。これがイタリアのみの特殊問題か否かは，読者の判断に委ねたい。わたくしは一人の後進として，本書の上梓を満腔の敬意をこめて言祝ぎ，ここに漸く地形図の空白が埋められた「18世紀のイタリア」が《ヨーロッパ啓蒙思想の格好の展望台》として賑わう日の到来を切に願う。

イタリア半島は，ルネサンスの震源地でありながら——あるいは，あるがゆえに——宗教改革を経ることなく教皇庁の反宗教改革の波に吞まれてしまった。イタリア啓蒙はこの悪条件との格闘から始まる。序章「国権主義から啓蒙へ」では，中世以来の皇帝派の遺産である《教会権力の世俗的支配を批判し，教会権力にたいする世俗権力の独立と優位を要求する》「国権主義(giurisdizionalismo)」が《反宗教改革に対立する思想として，イタリア啓蒙の母胎となる》(5頁)次第が強調され，1720年代のナポリで国権主義の潮流を代表したピエトロ・ジャンノーネ(1676-1748)の『ナポリ王国市民史』(1723年)が，世俗権力と教会権力の対立を調停しようと試みたジャンバッティスタ・ヴィーコ(1668-1744)の『新しい学』(1725年)に對置される。

第1章「ムラトリーとイタリア啓蒙の課題」では，帝権と教権の対立の最前線にあった北イタリアのモデナ公国にあって，国権主義と啓蒙を媒介したロドヴィコ・アントニオ・ムラトリー(1672-1750)が登場する。法曹であったジャンノーネは国家の世俗的支配の基礎理論としてのローマ法を依然理想視していたが，ムラトリーは，『イタリア年代記』(1744-49年)で中世史に依拠する国権主義を貫く一方，現実から遊離したローマ法と「金もうけの学問」に墮した法学を批判する『法律学の欠陥について』(1742年)で旧体制の腐敗を告発した。そして，永年の戦争の惨禍からの復興の希望をイタリアの諸国家にもたらしたアーヘンの和約(1748年)の翌年，『公共の福祉について』(1749年)を出版してイタリアにおける啓蒙的改革の時代の幕開けを告げるのである。

この『公共の福祉について』の核心を堀田氏は「貧困問題」と押さえる。それは《ムラトリーにおける貧民の家族のモデルは，第一に酒飲みの夫，第二に売春婦ないしはその予備軍である妻と娘，

第三にちかき将来における乞食もしくは犯罪者である息子からなる、といえる》(22-23頁)ほどに深刻であった。ここにおいて「知識人と貧民」という第I部のタイトルどおり本書の主題が提示される。いささか長文にはなるが、ここはやはり堀田氏本人の鮮やかな演奏に耳を傾けたい。

《ムラトリーにおける市民社会の成員は、[……]利己心のままに行動する無知な大衆と社会秩序を認識し、利己心を制御できる知識人＝「学識者」・「哲学者」・「賢人 (uomo savio)」とに分裂する。知識人たる統治者は、先に見た貧民家族に代表される大衆の世界が利己心に支配されていることを承認したうえで、かれらに経済的自立の道と社会秩序（それは同時に神の秩序である）をあたえなければならぬ。『公共の福祉について』において、以上のような形で登場した知識人と貧民は、イタリア啓蒙思想のふたつの焦点をなすことであろう。貧民は、旧体制の欠陥の象徴であるとともに、新しい社会を形成する主体の不在ないしは未成熟を表現するものであり、知識人には、イタリア諸国家の改革を遂行する期待がこめられている。知識人と貧民の分裂は、イタリア啓蒙思想において、ついに埋められることはないけれども、両者を結びつけるものは、貧困と後進性の克服、いいかえれば、生産力の育成という課題である。それにこたえうるのは、旧体制を擁護する学問と化した法学ではなく、経済学のほかにない。》(29-30頁)

かくして1754年にはイタリア最初の経済学講座がナポリ大学に設置される。その初代教授に就任したのが、第2章「ジェノヴェージの封建制批判」と第3章「ジェノヴェージと啓蒙的改革——期待と不安」の主人公アントニオ・ジェノヴェージ(1713-1769)である。『学問文芸の真の目的にかんする論考』(1754年)で若い知識人＝「勉強熱心な

若者」たちに「有用な学問」を通じての公共の福祉への献身を呼びかけたジェノヴェージは、自らその実例として編訳したケアリーの『大ブリテン商業史』(1757-58年)への評注で膨大な「浮浪者」としての貧民の問題を論じたが、そこではまだ貧困の原因は「怠惰」に帰せられており《インドウストゥリアを振興する》重要性が強調されるにとどまった。やがて1764年に南イタリア全土を襲った大飢饉を契機に、怠惰はむしろ貧困の結果とされ、旧体制の社会構造的欠陥への認識が深められる。とはいえ、《ジェノヴェージの封建的大土地所有にたいする批判は、農民的土地所有の創出という方向へ発展する可能性をもはらむものであったけれども、所有権の神聖の前でたちどまったジェノヴェージは、それと抵触する土地改革という路線をさけ、いわば封建的土地所有の安楽死路線をとった》(54-55頁)とされる。土地の永代小作化と農業改良の推奨を「安楽死路線」とは言い得て妙であるが、それを直ちにジェノヴェージの思想的な限界とする解釈はいかながなのか。わたくしはかえってこのようなところに二枚腰の改革者としてのジェノヴェージのリアリズムを感じる。たしかに、経済学上の主著『商業すなわち市民経済学講義』(1765-67年)も、倫理学上の主著『正義論すなわち公正および誠実にかんする哲学』(1766年)で展開される「実践道徳としての宗教」を前提としており、ジェノヴェージは《全能の神の正義を手放すことはできない》(85頁)。だが、ジェノヴェージ自身の経歴が示すように、農村に生まれた「勉強熱心な若者」が知識人へと成長する経路の最たるものが聖職者の途であったのだから、教会の世俗の支配はいかに激しく批判しようとも、カトリシズムそのものの否定はかれらには思いもよらぬであろうし、広汎な「知識人の党」の結集をも危うくしかねない。《啓蒙の思想と運動を受容する社会的基盤が極度にせまかった》(98頁)ナポリで、ジェノヴェージは《新しい社会を形成する主体として、富への道と徳への道が一致する中流階級を想定したけれども、かれらが近代的生産力

の担い手へと成長する道を見つけることができなかつた》(93頁)ため、中国の「士大夫」を理想化した《「中間層」としての「賢人」》(92頁)に改革への希望を託したのであるが、この「賢人」の社会的出自は開明的貴族から上層農民にまで及んでいたこともまた事実である。そして、かれらに向かって情熱的な教師ジェノヴェージは、《宗教は論議するな》、《一般論や引用は無用だ、[教会の死手財産を調査するために] 計測具を手に赴け》と説き続けたのである。

なお、第2章には補論「ガリアーニの経済思想」があり、『貨幣について』(1751年)や『小麦取引についての対話』(1770年)で名高いフェルディナンド・ガリアーニ(1728-1787)の経済思想は、《ジェノヴェージとは異なって、保守的な性格をもち啓蒙的改革の経済学という枠組みには合わない》(57頁)ことが論証されている。わたくしもこの評価には賛成する。

3

第II部「ミラノにおける啓蒙思想の展開」では、北イタリアのオーストリア＝神聖ローマ帝国領ロンバルディア(ミラノ公国)が舞台となる。第4章「知識人の孤立と犯罪者の反抗」は後半部の序説といえよう。ミラノの啓蒙は1760年代以降、都市貴族の子弟の青年たちが集う「拳の会」とその旬刊雑誌『コーヒー店』(1764-66年)によって推進された。その中心となったのがピエトロ・ヴェッリ(1728-1797)とチェーザレ・ベッカリーア(1738-1794)である。かれらの多くは、元老院を牙城とするミラノの支配層(パトリツィアート)たる家門＝父祖の世代への反逆児であったから、旧体制を擁護する学問としての法学は当然かれらの激しい批判的となる。また、既にオーストリアは国家教会主義を推進していたから、国権主義は自明の前提であり、いまや宗教の支配からの市民社会の独立が目標となる。ヴェッリが『幸福にかんする省察』(1763年)で《正義の根拠の法について、

「快樂への愛が唯一の普遍的な法[＝法則](legge universale)であり、感覺的存在はかならずそれにしたがう」とのべる時、市民社会の秩序原理としての法＝法則は、もはや神の理性の命令ではなくなる》(109頁)のである。公共の福祉を実現する「社会契約」と「功利主義(最大幸福原理)」にもとづく新しい社会の形成がかれらの課題となるのだが、市民社会の秩序の自律性はまだ保証されない。《イタリアの啓蒙思想家たちのばあい、フランス啓蒙をうけついで、社会形成の主体は立法者》(113頁)とならざるをえない。大多数の「俗人」・「大衆」は社会秩序の必要性を認識する理性的能力をもたないからである。ヴェッリは『幸福にかんする論考』(1781年)で民衆世界の感性的原理である「同情」や「友情」に着目するのだが、その作動範囲の狭さ(＝「仲間意識」)は社会全体をおおう秩序の統合原理たりえない。となれば、民衆の世界において利己心を基礎として築かれるべき秩序は、経済学の形式的な合理性によって外から把握されるほかはない。官僚として係わったミラノの貿易差額論争を踏まえ、ヴェッリは『政治経済学にかんする省察』(1771年)で貨幣的な経済学を展開するのだが、徴税請負人に典型される前期的資本(高利貸資本)に対抗して、貨幣資本を生産資本へ転化させる道筋を有効需要論的な価格理論でとらえながらも、経済循環の把握＝国内市場論をもたぬがためにロッキの貿易差額論以前にとどまってしまう(第5章「ヴェッリ『政治経済学』の基本性格」)。ヴェッリに残された選択は、時空をこえた栄光をもとめての学芸の世界への退却しかない。「知識人の孤立」である。

これとは対照的に、ベッカリーアの出発点となるのは「犯罪者の反抗」である。《ジェノヴェージにおいて、旧体制批判の要に存在しながら反社会的行為であるゆえに道徳的に断罪されていた貧民の犯罪は、ベッカリーアにおいて、ゆるぎることのできない人間の自然権＝自己保存権を回復する第一歩と位置づけられる。したがって犯罪者は近代的個人の萌芽なのであって、イタリア啓蒙にあつ

て近代的個人は、社会的少数者のうちに犯罪者と知識人へと両極分解してうまれる》(121頁)のである。かくして、第6章「ベッカリーア『犯罪と刑罰』の社会思想」では、モルレ編の仏訳(1765年)により罪刑法定主義と死刑廃止論の先駆として全ヨーロッパ的な名声を博した『犯罪と刑罰』(1764年)が、実は単なる刑法学書にとどまらぬ、「利己的個人と社会秩序」の関わりを追求した社会理論の書であることが、原典の構成に即して明らかにされる。本書の白眉であり、ヴェントゥーリの未遂の課題は見事に果たされた。

刑罰は、しかしながら、あくまでも利己心(快樂苦痛原則)の盲目的な発動を抑制・誘導する外的規制にすぎない。そこでベッカリーアは『文体の本性にかんする研究』(1770年)において、美的快樂の享受能力として快樂苦痛原則にも通じる「趣味」の形成のうちに利己的個人のもつ社会性を読みとろうとする。だが、唯物論的な感覚論によって社会はばらばらの利己的個人に分解され、内面化された道德感情の当事者性が際立つばかりで、文体の美(熱情)による知識人から民衆への架橋の試みも挫折する(第7章「ベッカリーアにおける道德感情とレトリック」)。

近代社会の主体形成論に失敗したベッカリーアは、輸入学問としての経済学の摂取によって客観的秩序の成立を理論的に先取りし、古い社会秩序に回帰することなく、利己的個人の解放の側にとどまろうとする。第8章「ベッカリーアにおける経済学の形成——ケネーからヒュームへ」では、ベッカリーアの意に反して出版された通行のクストディ版(1804年)『公共経済学の原理』(ミラノの帝室学校経済学講座での1769-71年の講義録)と、遺稿となったその清書稿とが比較検討され、両者の間の土地制度認識の転換が確認される。すなわち、ベッカリーアを大農経営の生産力的優位を承認したケネーの徒・イタリアの重農主義者とするクストディ版に基づく通説に反して、清書稿では快樂苦痛原則を基礎に独立自営の小土地所有農民の勤勉とその生産力的優位が主張されている

のである。その想源はヒュームの『政治論集』に推定され、そこからの影響として、(1)農工分業の展開を軸とする近代社会の自律的な形成過程にかんする歴史認識、(2)奢侈論において展開される(インドゥストリアの交換としての)国内市場論、(3)機械的貨幣数量説による貿易差額論批判が挙げられている。わたくしには、しかし、以前別稿(本誌79巻5号・6号)で検討したように、これらの論点は——(3)を除けば——ジェノヴェージにも該当するように思われる。(3)についても、国民国家形成の緒に就いたばかりのナポリと、オーストリア帝国の経済特区的なミラノとは、同日の論ではないであろう。

とまれ、終章「経済学とイタリア啓蒙——理論の機能転化」では、ヒュームにおいては「人民の特権」としての名誉革命体制を擁護する「体制の科学」であった経済学が、ベッカリーアでは封建的都市貴族の特権と旧体制を批判し、改革の理論的基準を提供するユートピア的な「批判的経済学」へと機能転化すると総括される。旧体制の核心をなす封建的土地所有を解体する土地改革は所有権の絶対性という障壁に阻まれていたが、それをつきとらず衝撃は、外から、フランス革命によってもたらされる。1799年ナポリ革命の挫折に触れ、《こうして、旧体制にかわる新しい社会の形成というイタリア啓蒙の課題は、一九世紀に手わたされることになる》と述べて本書は締め括られる。

4

ここでわたくしは、「受動的革命」論で著名な転向したジャコバン主義者の苦汁に滲んだ省察を想起せざるをえない。《ナポリの国民は、二つの「国民」に、二つの異なる時代、二つの異なる風土に分かたれていたと言わねばなるまい。諸外国を範として形成された知識層の文化は、国民全体が必要としていたのとは別物であった》というヴィンチェンツォ・クオーコ(1770-1823)の『1799年ナポリ革命史論』の一節をである。この「二つの国

民」の問題を全イタリア規模で追究し、斬新なイタリア啓蒙像を定礎した本書にわたくしは賞賛を惜しまない。

だが、ここにはやや性急な図式化がありはしないか。とりわけ第Ⅰ部から第Ⅱ部への展開が、わたくしには先駆者の宿命ともいべき決死の跳躍のように見える。カリスマ的なジェノヴェージの先導によって始まったばかりのナポリの啓蒙は、ミラノの啓蒙の前段階ではなく、複数のイタリア諸啓蒙中の一類型として、その行く末を見極めるべきではなかったか。教会勢力に逐われ亡命・獄死の非命に果てたジャンノーネの「難破」によって「急進的啓蒙」の命脈を絶たれたナポリで、「カトリック啓蒙」の可能性に挑戦したのがジェノヴェージであり、その弟子たちの世代がフランス革命に遭遇すると「反啓蒙」のヴィーコは「汎啓蒙」の予言者に変貌する……。しかし、これはわたくしの未だ書かれざる物語である。

ところで、「二つの国民」の間にコミュニケーションの余地は全くなかったのだろうか。わたくしは、ジェノヴェージの「人気（庶民性）」を伝える一つの逸話を紹介して本稿の結びとしたい。

《ナポリでは、[……] 詩の朗誦が終わると、互いに物語について論じ合い、質問を浴びせ合っているうちに、時として取っ組み合いとなり、果ては殺し合いとなることもある。ある真夜中のこと、激しく言い争っていた二人のナポリの庶民が、(タッソーの『イエルサレム』の) リナルドとジェルナンドのどちらに理があるか教えてほしいと、名高いジェノヴェージの住まいを訪ねて、かれを叩き起こしてしまったことがあった。》この逸話を書き留めたのは、19世紀イタリア・ロマン主義の最大の詩人ジャコモ・レオバルディ (1798-1837) である。

奥田 敬

(甲南大学経済学部助教授)